

原大育ちシークワサー

原木危機で“里帰り”

沖縄県を代表するかんきつ類「シークワサー」。弘前大学農学生命科学部の石川隆二教授が研究のために取り置き、栽培していた「晩生型」の原木の幼木6本が2月中旬、生まれ故郷の同県国頭村に“里帰り”した。農家の高齢化などで原木が枯死する危機に見舞われたため、幼木は石川教授らの手で移植された。今後は絶滅防止、付加価値のある果物としての産業化を確立するために地元農家と協力して品種登録を目指す。（稲葉智絵）

石川教授 研究用に栽培



早生型のシークワサー



石川教授は10年ほど前、方言の多様性を研究する言語学研究者の大西正幸氏（同志社大研究開発推進機構）の多様性を研究する言語学研究者の大西正幸氏（同志社大研究開発推進機構）

沖縄・国頭村に移植

絶滅防止 品種登録目指す

構想託研究員）のプロジェクトに参加。生物と文化の多様性の仮説を検証するため、地域によって呼び名が異なるシークワサーに着目し、多様な遺伝資源が残る国頭村奥地区のDNA調査、研究を開始した。シークワサーは日本の在来作物で、沖縄本島北部が主要産地。例年4月ごろに開花して、9月から緑色で酸味の強い青切りの果実が出回り、1月にオレンジ色に完熟した果実が同県内だけで流通する。野生種と栽培種があり、奥地区の園地では自然の取り木から移植されたものが多く、石川

抑制するといった効果が注目され、ジュースなど加工品の需要が高まったものの、それと反比例して10年当たりの単価が年々低下。農家の高齢化が進み、廃園するケースも増え、在来の遺伝資源が失われる危険性が指摘されていた。里帰りの晩生型は早ければ2年後に品種登録される見通しという。石川教授はサポートを続けていくとし、「日本の在来作物を残すことが地域産業の維持、食の多様性につながり、日本人の生活を豊かにする」と力を込めた。（石川教授提供）

だす。石川教授も協力する教授は「複数の系統が存在する」と説明した。系統間には成熟期や果実の形質の違いが見られるという。調査で「9月に青いまままで糖分が高まる『早生型』、6月に熟す『晩生型』、8月に熟す『晩生型』がDNA研究のために持ち帰った」とした。ただ、品種登録は種子なしの「仲本シードレス」のみだった。ビタミンやミネラルが豊富で、血圧、血糖値上昇を抑制する効果が期待されている。石川教授は先

この画像は、当該ページに限り“陸奥新報”の記事利用を許諾したものです。転載ならびにページへのリンクは固くお断りします。